

尾道商業会議所記念館 第21回企画展示

2013年6月21日～2013年10月30日

テーマ／尾道文化の興隆と商人たち

歴史深い都市・尾道は、また、文化的側面も奥深く、種々な分野に亘って各種各様の尾道文化が花開いた。

近現代期であれば、小林和作、小野鉄之助らに代表される文化人たちが、芸術面を中心とした文化サロンを形成し、今に続く尾道文化の芽を愛おしみ、育み、繋いで来た。

最近尾道でも見直されつつある茶の湯の文化も色濃く、それにまつわる伝承（秀吉、荒木村重の来尾伝説に伴う）、延長線上にある「茶園（さえん）文化」（尾道町人が営んだ風雅な別荘で、茶室と庭園が附属する）なども、この分野の歴史と文化の深さを如実に物語っている。

これら諸文化の源流域に位置しているのが、近世江戸時代の尾道に見る、町人文化で、その立役者として、橋本竹下を筆頭とする、文化に対する理解と造詣の深い、尾道商人たちの存在があった。

経済一辺倒ではなく、文化人としての顔を持ったこれら尾道商人たちは、文人墨客を招き入れ、手厚くもてなし、時に教えを乞うたり、時にその活動を支援するなど、積極的に文化交流を図った。

尾道往来の文人墨客では、歴史家で文人の頼山陽、神辺の教育者で儒学者の菅茶山、南画家の大家・田能村竹田など、錚々たる名前が今に語り伝えられており、交流のレベルの高さが窺い知れる。

外来だけではなく、内にもその芽は生まれ、尾道の商家に生まれ、女流画家として世に出た平田玉蘊（「ぎょくうん」と読むが、尾道ではもっぱら「ぎょくおん」で通る）がその筆頭格に上げられるほか、同じく商家の子息の身にあり、頼山陽の門下として、詩歌や書に秀でた宮原節庵などがいた。

時代（江戸後期）は商都としての輝きがピークにあった、いわゆる黄金期にあり、そうした経済的な豊かさ・余裕が、尾道文化の興隆を後押しした一面もあるが、やはり全ては人の言葉通り、当時の尾道町人たちの文化度、見識、ものを見る眼の確かさが先ずあってのことで、彼らの存在抜きにして、当時の、また今に受け継がれる尾道文化を語ることは出来ない。

本展示では、文化的営みを成した尾道商人の内から数人をピックアップし、その人物伝を辿り、彼らの功績や気概の一端に触れてみたい。

玉浦風雅年譜

西暦	元号	月日	事柄
1782	天明2	6月	菅茶山、頼春水来尾。勝島敬中（惟恭）らと、松本氏の茶園「賀島園」へ舟遊する。
1785	天明5		頼杏坪、船で尾道へ至る。橋本栄蔵、勝島九右衛門（翼斎）がこれを出迎え、しばしの歓談。
1787	天明7		平田玉蘊生まれる。
1788	天明8	9月16日	司馬江漢、尾道へ来る。
1790	寛政2		松本氏の茶園「賀島園」を記す『賀島記』著される。
1791	寛政3		鳴子庵稲井（川崎屋庄三郎）、「塵塚」を著す。
1803	享和3		勝島惟恭、「芸備古跡志」著す。
1805	文化2	9月24日	菅茶山、油屋亀山家へ宿泊。次いで賀島へ泊まる。
		10月24日	蜀山人（大田南畝）、長崎遊学の帰途、尾道へ寄る。
1806	文化3	6月17日	伊沢蘭軒、菅茶山来尾。門人である亀山士綱（元助）宅で、徹宵の宴を催す。
1810	文化7		新宮涼庭、長崎への途次、菅茶山を訪問の後、尾道へ。この時、橋下竹下邸で、玉蘊、玉蘊姉妹の作画を観る。
1814	文化11	9月22日	頼山陽、熊谷氏の茶園「抱翠園」へ来園し、「抱翠園記」の撰文を託される。
1815	文化12	10月5日	菅茶山、亀山元助宅へ宿泊。同夜、玉蘊らが茶山のもとへ参集。
1816	文化13		正月、亀山士綱「尾道志稿」前編を脱稿。
1818	文政1		菅茶山が「尾道志稿」の序文を書く。
1821	文政4		【尾道町絵図】が完成（亀山士綱の作成と見られる）
1823	文政6	2月8日	田能村竹田、初来尾。橋本竹下、亀山夢研（士綱の子）らが迎える。この折、玉蘊を2度訪ねる。
1825	文政8	10月13日	頼山陽、尾道滞在中の梁川星巖夫婦と会し、痛飲。
1826	文政9		「尾道志稿」後編脱稿。 田能村竹田来尾。亀山夢研が仕立てた船で尾道から長崎へ。
1829	文政12		頼山陽、橋本竹下邸へ宿泊。「耶馬溪園」を描き贈る。
1833	天保4		橋本竹下、本因坊秀策の墓才に着目、見出す。
1834	天保5		田能村竹田、尾道に半年滞在。竹下、亀山夢研らと、千光寺の内に「癩紅碑」を建てる。 橋本竹下、飢饉の難民救済事業で慈観寺本堂再建に着手。

※ 入船裕二著『玉浦詩話 近世の尾道を漢詩に見る』収録「玉浦風雅年表」参照

亀山士綱 ～尾道学の先覚者～

江戸時代後期の尾道の状況、林立する寺社の由来沿革、歳時記など、今に詳しく概観できる格好の文献史料として、『尾道志稿』がある。これを編み著したのが、油屋の屋号を称する豪商・亀山元助、号・士綱であった。

学問と読書を好んだのは子どもの頃から。長じて菅茶山ら地元の教養人・知識人に学び、京都へ遊学の後、頼春水とも交友ある儒者・若槻幾斎に師事し、学徳を更に広げた。

学問を修め、尾道へ帰郷の後、橋本竹下に同じく町年寄を勤めて、32歳の若さで尾道町政の一端を担った。

学問の幅は広く天文暦法にも通じ、遊芸の種もその数多く、そのマルチな才で尾道往来の文人墨客と親しく交わり、橋本竹下と並んで尾道文化を担い、支える、その中心に位置した。

文化人としての顔の中でも、亀山士綱を語る上で欠かせない業績が、冒頭の『尾道志稿』の編纂・執筆であり、全10巻に『続尾道志稿』2巻をまとめ上げている。広島藩の地誌『芸藩通志』（頼杏坪編）に伴う作業のようであるが、尾道における郷土誌の最初であり、尾道研究の尾道学においても元祖とあって良い。

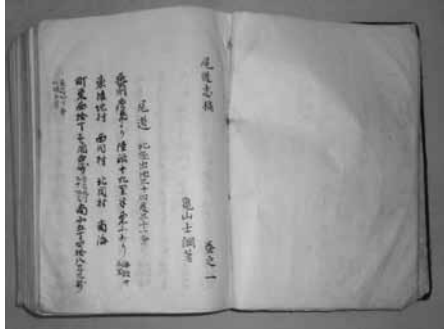
橋本竹下が難民救済事業に着手したように、士綱もまた社会的還元・奉仕に力と意を注いでいる。

大正末の山口玄洞による上水道敷設まで、尾道は飲料水の確保に悩まされ続けていた。飲み水は買わなければ得られないという不自由をかこう町民の為、私財を投じて町内複数箇所の井戸掘りに着手。その内の一つが、東土堂の線路と国道に挟まれた窮屈な位置に在る「万年井」である。

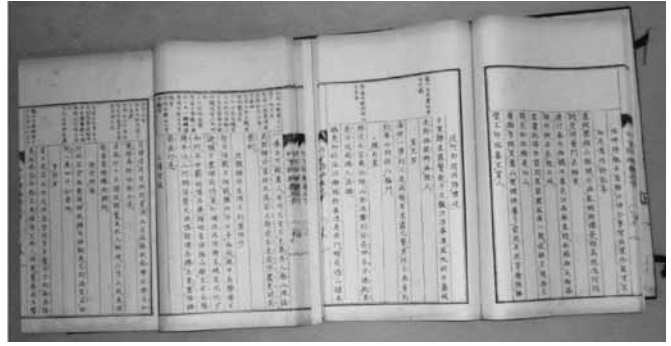
1808（文化5）年に掘りかえられたこの井戸は、水量豊

富に出、町民に喜ばれた井戸であったという。それ故にこの井戸を、別名「亀山井戸」とも呼んだ。

1827（文政10）年7月27日、58歳でこの世を去り、一建立（菩提寺）の信行寺墓所に眠る。



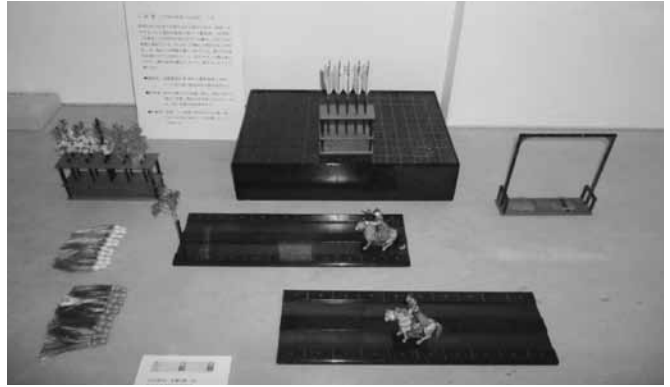
「尾道志稿」
尾道市立中央図書館
所蔵



「竹下詩鈔」尾道市教育委員会所蔵

みくみばん 三組盤

香道における香りを聞き分ける遊びである「組香」の中でもっとも競技的要素の強い、「競馬香」「名所香」「矢数香」に汎用的に使えるゲーム盤で、それらの収納箱も兼ねている。中には、「立物」と呼ばれる人形や花、矢、旗などの事物が備えられている。遊び方は香木を聞き当てた当否によって、双六のように駒を動かしたり、旗や造花を盤上に立てて、取り合ったりして競いあう。



尾道市教育委員会所蔵

かわさき や しょうさぶろう 川崎屋庄三郎 ~文筆巧みなる商人~

亀山土綱の『尾道志稿』と並ぶ尾道学の先覚書として、今一つ『塵塚』という題を付した書物がある。『尾道志稿』に先立つ1791（寛政3）年の刊になり、『尾道志稿』が地誌的な文献であるのに対し、こちらは随筆として、尾道の歴史的部分をまとめた一書で、著者は鳴子庵稲井の号で知られた、川崎屋庄三郎という尾道商人であった。

川崎屋は久保町に住した廻船問屋で、町役人（町年寄格）も勤める家であった。岩国藩主で毛利一門の吉川家にも出入りをし、またその経営は本業の廻船のみならず、造酢や米穀の仲買もやるなど、相応の位置と財力を得た商家であったようである。

生まれは1740（元文5）年、平山角左衛門が尾道町奉行として赴任して来た年である。先代の跡を継ぎ川崎屋の経営、また、庄屋役や問屋組合の頭（リーダー）などの要職もこなす中で、文化的営みを好み、文筆勤しみ、多くの文化人らと交わり、素養を深めた。号に同じく「鳴子庵」と称した久保川端にあった茶園（さえん…別荘・庭園）も、文化サロンとして賑ったであろうことが想像される。余談ながら、この鳴子庵の茶園には、キリシタン灯籠の織部灯籠が見られたことが確認されている。

はしもとちっか 橋本竹下 ~頼山陽、菅茶山に師事した名士~

文化人でもあった歴史の中の尾道商人を語る上で、筆頭格、いや、その代名詞的存在として異論が無いのは、橋本竹下である。

尾道豪商の中でも常に最上位に位置した橋本家、屋敷・灰屋の当主として、また、町の有力者、名士として、江戸後期の尾道に生き、活躍の足跡を残す彼は、1790（寛政2）年、三原藩の家老職にある三原町の名家・川口家に生まれた。橋本家より乞われて代を継ぎ、橋本吉兵衛（後に荘右衛門に改める）と称した。竹下は号。

彼の人物伝を記す文献何れにおいても、「学を好み、詩文に秀で、風流洒落ある紳士、身分の高低問わず、誰にでも礼をもって接し、人々から慕われる君子」であったと口を揃える。

福山藩お抱えの儒学者で、漢詩人としても知られた神辺の菅茶山に学び、次いで京都へ出て、頼山陽の門を叩き、師弟関係を結んだ。その交わりは深く、山陽は実家のある竹原へ帰る道すがら、必ず尾道の橋本竹下を訪ね、滞在が長期に及ぶこともしばしばであったという。

本体を成す商いも怠ることなく、経済人としての職務も全うし、町内自治を担う町年寄の要職もこなした。

既に隠居の身にあった1833（天保4）年の飢饉にあつては、難民救済を目的に、橋本家の菩提寺であった時宗慈観寺（長江）の本堂再建事業を企て、困窮者を人夫として雇い、再建工事に従事させた。それによる報酬によって、尾道では餓死者を一人も出すことは無かったというエピソードは、竹下の事績を語る上で大きい。

因島出身の碁聖・本因坊秀策の碁才に逸早く目を留め、三原藩主へ推挙したのも彼だった。故に秀策は竹下を「茶園の大人」と呼び、生涯尊崇の念を持ち続けた。

地元で花開いた女流画家・平田玉蘊への支援と交流もよく知られる。

晩年に至り失明の身になるも、詩文の創作・執筆は止まることはなかったという。

1862（文久2）年3月4日、72歳で生涯を閉じ、慈観寺の墓所に眠る。

俳句にも親しむ、というよりも深く傾倒していたようで、元・肥前大村藩の藩士で、尾道に一時期、庵を結び在した俳人・長月庵若翁（堀若翁とも）らと共に、松尾芭蕉の百年忌を尾道で営み（1792・寛政4年10月12日）、一同で尾道初の句会を催し、記念の句集『其蔓集』を出版している。この折に建立された句碑が、千光寺の赤堂下に現存する。

1805（文化2）年5月2日、66歳で生涯を閉じ、長江の福善寺の内に墓碑が建つ。



「塵塚」
尾道市立中央図書館所蔵

商人たちの文化的嗜み ～尾道における茶の湯の文化～

商人達が繰り広げた文化的嗜みの中でも、とりわけ風雅なる景を描き出したのは、茶の湯の文化であった。

茶室と庭園が織り成す商人達の別荘を、「茶園」と呼び慣わし、親しんだ歴史に、盛んなる往時の情景が偲ばれるところだが、尾道における茶の湯の歴史的経過については、今ひとつはっきりしないところが多分にある。

朝鮮出兵で九州へ赴いた太閤豊臣秀吉が、大坂城へと戻る道中、ここ備後尾道へ足を止め、後に本陣を務める豪商であり町の有力者であった、笠岡屋・小川家で軍旅の疲れを癒した。その際、主人である小川又左衛門は、茶に深く親しんだ秀吉をもてなすべく、一服の茶を献じた。用いた水は尾道中の井戸水を吟味した上で、最も美味なりと認められた、長江山城戸近くに在る「柳水井」（今も現存するが飲用は出来ない）の水であったと語り継ぐ。

また、秀吉の主君・織田信長に背き、毛利方へ逃げた摂津の武将・荒木村重が、毛利の内であった備後尾道へ至り、隠遁先とした水之庵（時宗西郷寺の末寺として、東久保町の市立中央図書館裏手に在った）にて、俗世を離れて茶の湯を楽しんだとの逸話も残す。

何れも伝説か史実か判断のしようがない話であるが、江戸時代以前の早い段階で、茶の湯文化が尾道に芽吹いていた、もしくは芽吹き始めた痕跡を、おぼろげながらもそこに見い出せるのかもしれない。

流派として辿り見ると、尾道に最初に根付き、広まったのは「藪内流」であった。

久保町防地の山王社（山脇神社）下に庵を設け、その普及に努めた地元茶人として、内海自得齋の名が残る。自得齋の庵は、文化サロンとしても賑わいを見せ、茶に親しむ内外の文化人が往来、頼山陽、田能村竹田も常連の内に聞かれる。浄土寺に遺る茶室「露滴庵」は、この藪内流の造

作になる。

長江山城戸の茶園「挹翠園」では、園内に焼き窯を設け、各種の器を作り出していたことが（江戸時代に見られる御庭焼の内に括られる）、同地での採集土器から確認される。その大半は煎茶器であり、こちらでは煎茶の嗜みに興じていたことが窺い知れる。



尾道遺跡出土品より「瀬戸焼天目茶碗」
尾道遺跡発掘研究所所蔵



尾道遺跡出土品より「備前焼小壺」
尾道遺跡発掘研究所所蔵

平田五峯 ～玉蘊の父も画を能くす～

江戸後期の尾道文化を、画の道で艶やかに、また、たくましく彩った一輪の花…尾道に生きた女流画家・平田玉蘊の父・平田五峯も、画と向き合い、愛した人であった。

屋号は福岡屋で、福岡屋新太郎を称した（五峯は号）。家業は木綿問屋で、屋敷地は土堂本通り、桂馬蒲鉾店北側付近にあり、その傍らに一里塚が在ったことから、「一里塚の福岡屋」とも俗称された。

池大雅の門人である尾道出身の画家・福原五岳ごがくに学び、玉蘊もまた五岳に学んでいる。玉蘊の作品は多く目にされる中で、父である五峯の作品を、今に観ることが出来ないのは甚だ残念である。

能楽にも造詣深かったとの記録が一部に見えているが、こちらについての詳細は掴めない。尾道における能楽としては、長江・長神社の祭礼において、明治後期まで神能（奉納の能）が演じられていたと伝わる。

1806（文化3）年12月13日、47歳で歿する。屋敷地から程近い持光寺に眠る。

勝島惟恭 ～土綱に続く郷土史家～

亀山土綱、川崎屋庄三郎（鳴子庵稲井）が尾道における郷土誌を取りまとめたのに対し、安芸・備後、即ち広島県下の範囲でそれを実践したのが、勝島惟恭（かつしま・これやす）、通称・敬助、号・翼斎。

勝島家は、屋号を鯛屋といい、尾道町の組頭役、年寄役も勤める有力町人であり、商家であった。代々学を好む筋であったようで、惟恭も儒学者・伊藤東所に学び、地元では同じく伊藤の学に通じる児玉禎義に学び、詩文も嗜んだ。

伊藤東所の子で同じく儒学者である伊藤東里が序文を寄せ、享和3年（1803）3月に出版されたのが『芸備古跡志』全10巻で、芸備両藩内の寺社・名所旧跡を丁寧に拾い集めた大著である。その前段には、『行余記聞』を前・後・続の三篇著している。

1808（文化5）年6月12日歿。享年49歳。墓所は東土堂の光明寺に在る。



手紙の内容（抜粋）

前略。お元気ですか。突然ですが、こんど、新興芸術派の雄、井伏鱒二氏が、福山へ帰省なされますので、私も、急に尾道を見たくなり、中村正常氏などさそって、三人で、尾道で講演いたしたく思いますが、講堂（女学校の）は借りられませんでしょうか。私の母校でもあり心よく貸してもらえないでしょうか…中略…井伏氏が福山の方でもありますので、講演をしても大変面白い事と思います。骨を折って戴けないでしょうか…

— 芙美子から今井篤三郎に宛てて出された依頼文より抜粋 —

林 芙美子、故郷に錦を飾る

～尾道商業会議所議場での凱旋講演会～

文学的才能の芽をふつふつと育み、多感な青春のひとつを過ごした尾道の街は、林芙美子にとって、多くの故郷の中でも、輝いて見える故郷の一つだった。

そんな思い出深い故郷尾道へ、颯爽と、誇らしげに、ベストセラー作家・林芙美子が降り立った、いわば凱旋の日があった。それが、ここ旧・尾道商業会議所（当館）で、1931（昭和6）年4月28日に開かれた、尾道文芸講演会である。

前年の1930（昭和5）年、改造社より刊行された『放浪記』がベストセラーとなり、芙美子は一躍文壇にその名を知らしめた。その追い風をかけて開かれたのが尾道での文芸講演会であったが、尾道側からの企画・招聘ではなく、芙美子自身が自主企画した講演会であった。

凱旋講演の企画は、先ず母校・尾道高等女学校（現・尾道東高校）の恩師で、芙美子が熱い信頼を寄せた今井篤三郎へ、投げ掛けられる形で始まる。

しかし、女学校側は芙美子のシンパ（特定の政治思想の信奉者）的側面を警戒し、学校を会場とする事は許さなかった。今井氏が別に会場を探し出した結果が、尾道商業会議所2階の議場だった。

当日午後6時に始まった講演会では、井伏が「チェホフを語る」、芙美子が「彼女たちへ」の演題で登壇。当初の予定にあった中村正常、次いで設定された文芸批評家の小林秀雄の姿は無く、代って、尾道出身の女流作家である横山美智子に加わり、「人生と芸術」の演題で講演するに至った。横山は、偶々帰郷していたところを乞われてのスポット登壇であったらしい。



凱旋講演に立った頃の林 芙美子（1931（昭和6）年28歳）